

コロナ禍での学びを想像力に変えて

益田市立益田中学校 三年 河上芽生

新型コロナウイルスが流行し始めて約三年半。未知のウイルスは人々を感染の恐怖に陥れ、私たちは行動を制限せざるを得なくなった。修学旅行や、体育祭、文化祭、所属する吹奏楽部の行事など、体温管理やソーシャルディスタンスが必要になり、自分が思うように自由に行動できないこともたくさんあった。それどころか、行事そのものがなくなってしまい、悔しく悲しい思いもしてきた。ようやく制限が緩くなってきた今、少しずつ日常生活を取り戻してきていて、学校生活に活気が戻ってきたように感じ、とてもうれしく思っているところだ。

私自身、昨年十二月にコロナウイルスに感染した。軽症と言われ、自宅療養だったが、高熱がでてめまいを起こし、起き上がれないくらいひどい症状だった。たくさんの人々が亡くなっているコロナウイルス感染症。私も悪化して死んでしまうのではないかという恐怖でいっぱいになった。

そして、症状が治まってきた時新たに感じた不安は、家族や友達にうつしてしまったのではないかということだった。私が療養中は、母が付きっきりで看病してくれた。そして、感染がわかる前日まで学校に行っていたし、給食を食べる時や、部活動をする時にはマスクを外していた。私の大切な人達が私と同じように苦しい思いをしたらと思うとたまらない気持ちになった。それから、当時は濃厚接触者という定義があった。父・母・兄も、職場や学校を休まなければならなかった。大事な行事もあったのに迷惑をかけてしまい申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

家族は私に、「気にしないで。早く元気になろう」「悪いのはウイルスで、芽生じゃない。大丈夫だよ」と優しい言葉をかけてくれた。また、学校に復帰後、友達も「大変だったね。もう体調は大丈夫？」と気遣ってくれた。周囲の人々の理解があり、優しい声をかけてもらって胸がいっぱいになった。

私が感染した際に不安を感じた理由は、世の中がコロナ禍に入った頃、「益田の中学校で感染者がでたらしいよ」などと、不確かな情報がよく出ていたことに起因する。ある時、買い物をしていると「中学生が感染したんだと。どうせチャラチャラ集まって遊んどって広まったんじゃないか」と大きな声で話している人がいた。もし、この時自分が感染者だったとしたら、どんな気持ちになっていただろうか。憶測だけで根も葉もないうわさを流すべきではないと思った。自分が感染して分かったことは、コロナウイルスは誰にでもかかる可能性があるということだ。毎日手洗い、うがい等実行して気を付けていたにもかかわらず、私は感染した。また、県内にいたほうが良いとか県外に行ったら感染するというのも、明確な根拠はない。私はずっと益田にいて感染したが、兄は部活の遠征や学校行事で県外に何度も出かけているにもかかわらず今まで感染したことはない。不確かな情報が独り歩きし不安をおおる。またSNSで顔も名前も分からない誰かが、毎日のように誹謗中傷をしている。「言

った者勝ち」というような世の中になっている気がする。感染することも怖いけれど、もっと怖いと思ったのは感染したことによって受ける心の差別だ。

私はコロナがあったからこそ気付けたと思うことがある。友達と楽しくおしゃべりしながら給食を食べていた日常。気軽に遊べなくなった日々。コロナ禍前の何気ない出来事が、どれだけ尊かったかということだ。誰もがそのことに気付いていれば、思いやりの心を持って、人と人とが支え合える世の中を作っていけるのではないだろうか。思いやりの心を持つには、想像力が必要だと思う。私の両親は私に辛いことがあった時、よく、「自分が苦しい思いをしたからこそ、周りの人の気持ちを考えることができる。その辛い経験は宝になるよ」と言う。コロナ禍を過ごすことで誰もが苦しい思いをたくさんしてきたと思う。コロナと関わりのない人はいないはずだ。

コロナ禍になって思うように行動ができなくなったこと、自分も感染し辛い思いをしたことで人の気持ちを想像する力がついたのではないかという気がしている。以前、愛媛県の有志の方が立ち上げた「シトラスリボンプロジェクト」のリボンをいただいた。リボンの三つの輪は、地域・家庭・職場や学校を表しているそうだ。このリボンをつけることで差別や偏見に苦しんでいる人を支えていくという意味を示すことができる。私はこのプロジェクトに勇気づけられて、今もリボンをカバンにつけている。

言葉は人を優しい気持ちにしたり、逆に傷つけたりもする。人が人の気持ちに寄り添うことが出来れば、人を思いやれる温かい社会を築いていけるのではないだろうか。このコロナ禍での学びを、想像力に変えて。